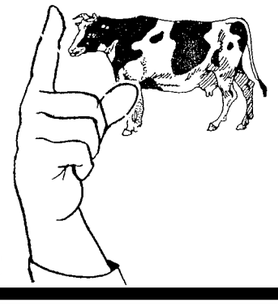

◆最優秀賞

見直したぞ！東京農業
私のイノベーション戦略～必要とされるために～

東京都三鷹市
冨澤　剛　43

とみざわ・たけし
1973年生まれ。専業主婦の妻と娘の3人家族。近くの実家で暮らす両親と農作業に精を出す。趣味は歴史小説の読書とその舞台になった土地への旅行。サラリーマン時代にコンピューターのサービスマンの経験あり。「ミュージカル好き」の一人娘のことになると話が弾む。

東京で「悪者扱い」
少年の心に悔しさ

「どんな仕事してるの？」「農業です」「大変だね」。職業を農業と答えると、よくこう言われます。今までの経験から農業に対して負のイメージや誤解を抱いていると推察できる返答です。

日本がバブル景気に沸いていた少年の頃、東京の農業はまるで「悪者扱い」されているのを聞いていました。「地価の高騰は農家が畑を売らないからだ」「地価の高い東京で農業をしているのは罪だ」「東京の農地は宅地化するべき」。揚げ句の果てにはある議員が「農家は肉体労働するしか能がない」などと発言し、さらに当時の世論調査によると農業は、きたない、きけん、きついの「3K」の代表的な仕事と思われていた。

これらは誤った認識だと考えていますが、少年ながら農家は迫害され蔑視されているのだなと感じ、同時に悔しい気持ちを覚えていました。

そして、歳月が過ぎた最近でも、やはり、「ITベンチャー企業」など人気の花形職業に対しては「かっこいいですね」「すごいですね」といった反応をよく耳にするのですが、農業は以前に比べると見直されつつあるとはいえ、「大変ですね」という返答。どんな行間があるにせよ、ともかく第一声で「大変だね」と言われるのがあまり好きではありません。

また、いまだに「土地を売れば大金持ちだね」とか、「畑を潰してマンションにしたら？」という人もいます。バブル時代の圧力に屈せず農地を守ってきた私たちです。滅相もない話です。農家の誇りを侵害するこういった認識を修正したい、そういう悔しい気持ちが私を奮起させることになっています。

冨澤ファームは、東京23区に隣接する東京郊外（多摩地区）の三鷹市にあります。私が4代目で農業歴15年。農家の次男として生まれ、教員を目指すも、会社への就職を選び、その後、ひょんなことから家業である農業を継ぐことを決意しました。そして現在、旬の農産物を中心に年間約30種類の野菜を生産し、消費地が産地という地の利を生かし、庭先直売やJA直売所、学校給食、飲食店等へ農産物を出荷しています。

私が就農した当時は、庭先直売所、JA直売所と市場に出荷をしていました。売れ残りや市場での安値に悩まされ、労働が報われないと感じることがありました。

農業の負のイメージを変える、稼げる農業にする、それらが私の農業のスタート地点でした。農作業の傍ら、積極的にスキルアップにも励み、参考書を読んだり、勉強会に参加したりしました。

その中で受講した野菜ソムリエの講座は、その後の展開も含め、私にとって大きな転機となっていきました。講座内で自己紹介をする機会がありましたが、農業を営んでいると述べると、何人かが声をかけてくれました。料理研究家、流通業、農業に興味のある方などなど。やがては商談へと発展し、都内の小中学校への学校給食の仕事を始めることになりました。

学校給食が軌道に
価値観も変わった

給食の仕事を始めると、販路に困るという問題が解消されました。使用する野菜の量が桁違いで、畑の在庫がみるみる片付いていきます。お陰で市場出荷から完全直売へシフトすることができました。今では市内も含め10校以上に出荷していますが、新たなる問題も発生、当農園だけではとても対応できなくなってきました。そこで、以前の私のように販路に困っていた生産者仲間を一人、また一人と誘って、今では6人が協力してくれるようになり、何とか学校給食を軌道に乗せることができました。

手塩にかけ育てたナスの生育状況を確認する冨澤さん

学校給食の仕事をしている中で栄養士さんとコミュニケーションをとる機会も出てきました。「おいしいお野菜ありがとうございます。食べ残しが減りました」とか「畑を見学させてください」など関心を持ち、評価をしてくれるのです。

これは私の価値観を変える大きな出来事でした。世間から負のイメージを持たれていると思っていた私にとって、とても嬉しく、自信を持つ契機になったのはもちろん、私も、協力してくれ敬意を向けてくれる栄養士さんを尊敬するようになりました。私からも「児童たちの感想が聞けて嬉しいです」「地産地消へのご理解ありがとうございます」といった謝意を表すようになりました。

心が通い始めるとさらに関わりが発展し、「学校へ授業に来てください」とか「栄養士向けの研修の講師をしてください」等、人材としても重用してもらえるようになったのです。野菜ソムリエが契機となって、給食の仕事が始まり、新しい気づきや人との繋がりを得ることができ、自分を成長させたり、周囲に影響力

を持つことができるようになったのです。

もっと人と繋がりを持ちたい、新しい知識を習得したい。そんな思いから今度は「江戸東京野菜コンシェルジュ」の講座へも参加し、こちらでも活動の機会を得ることができました。

その中で新宿を中心に伝統野菜の「内藤とうがらし」の復興・地域振興の活動をしている「内藤とうがらしプロジェクト」と繋がりを持つことができ、やはり仲間を巻き込んで内藤とうがらしの生産を始めることができました。農産物を使った地域振興・街おこしは、多くの人を巻き込む楽しいものでした。

社会問題の解決と新しい価値創造と

やがては自分達主体でそれをやってみたいと考え、今では東京の伝統野菜「江戸東京野菜」として認定されているノラボウ菜、寺島なす等の栽培も始め、商工者とも連携して東京の特産品化としての道を模索しているところです。京都の「京野菜の漬物」のように「江戸東京野菜の漬物」を誕生させ、またスイーツなどの加工品も送り出したい、飲食店にも江戸東京野菜を活用してもらいたい、夢の一つです。

都市農業への思いや悩みを共有する生産者らと（手前左から2人目）★

多くの人と繋がりを持つと新しい人の紹介もしてくれます。漬物業者の方やスイーツを作っている方、飲食店の方。たちまち意気投合して連携することになり、着実に夢の達成に近づいています。

このように販路を開拓し、ロスがなくなり、所得向上につながり、かつ販路拡大を望む生産者仲間へ貢献することもでき、他業種の方へも波及していくことができました。

がむしゃらに営農をしていたら、たくさんの人が喜んでくれていることに気づきました。お客さん、栄養士さん、児童、生産者仲間、飲食店さん、そのお客さん。人が喜んでくれるとモチベーションが上がり、仕事が楽しくなります。

販路開拓がひと段落した後、今度は農地や私の人材力を発揮できる活動を考えるようになり、二つのテーマを考えました。一つは農業を通じて社会問題を解消する、もう一つが新しい価値を創造するです。

私が今、力になりたいと思っているのは子育て支援です。きっかけは「子ども食堂」を始めようとしている方からの食材協力の依頼です。その社会的意義に感銘を受け、やはり農家仲間を巻き込んで農産物を提供する等の支援をさせていただいています。

さらに保育園への農業体験も始めました。近所の保育園に話を持ち掛けたところ、二つ返事で「ぜひとも！」とのこと。早速、園児さんにトマト、キュウリ、カボチャを自分の名札を付けて育ててもらい、かつ収穫できたものを寄贈しました。

これが思いのほか反響があって、保育士さんや保護者の方から「園児が畑に行くのを楽しみにしている」とか「こどもが楽しそうに家で畑でお仕事をした話をする」「貴重な体験をさせてもらいありがとうございます」といった言葉をかけてくれました。こどもが笑うと周りの大人も笑顔になります。人が喜ぶのを見るのは嬉しいものです。

新しい価値を創造することは、街おこしや特産品作りへの取り組みがそれに当たります。私の地元・三鷹市はまだまだ農業と商工・飲食業との連携が取れていません。

地域の主婦らが始めた「子ども食堂」のメニュー。提供した野菜がたっぷり活用されている★

私の構想は農業を起点として、商工・飲食店へ農産物を活かしてもらい、そしてお店や街が活性化し農産物需要も増え「三方よし」のローカルな経済活動を構築すること、さらに子育てを頑張っている方へはこどもが笑顔になるような活動を、農業や野菜に興味のある方へはそれに触れ合う機会を、といったように農の力で人が幸せになることです。

ところが、東京の農業いわゆる都市農業は、前に述べた「悔しい思いをした」という個人的な問題とは比べ物にならない最大の問題があります。

ある日の子ども食堂の献立。キュウリは1本まるごと提供された★

価値高める活動で必要な農地を残す

それは「相続」です。生産緑地法や相続税納税猶予制度などの都市農業を保全する法律は一応あるものの、相続の度に農地が減少してしまいます。東京は地価が高いため、事業を承継する際に莫大な相続税が課税され、農地を売却して納税するしかないのです。

後継者がいるのに国が農地を没収し、農業を廃業するという事態が発生しています。この問題は不可抗力で個人の力ではどうにもできません。一刻も早い法整備が必要となります。

そのためには都市農業の価値を高め、公益性や必要性を裏付けていく必要があります。都市農業は新鮮で安全安心な農産物を供給するのはもちろん、良好な景観を創出し、多様な生物のすみかともなり環境保全にも寄与し、また体験農園や市民農園など自然や土と触れ合える場でもあり、食育の場でもあります。そして災害時には緊急避難所にもなります。何より私が農業を軸に行っている活動は多くの人が喜んでくださっています。

必要とされるものになれば、世論が醸成され、きっと法整備もされる、そう信じながら活動を行っています。今私が耕作している農地はご先祖から預かっているだけ。そして地域の共有財産でもあると思っています。それらを次の世代にも残していきたい。自分の代に潰して転用するなど考えられないのです。

２０１５（平成27）年、ようやく都市の農地は市街化されるべきだという従来の考えから、保全されるべきだという都市農業振興基本法が成立し、16年には都市農業振興基本計画も決定しました。やっとスタートラインです。いつまでも東京に農地が残るように、これからも今以上に都市農業の価値を高める取り組みを行っていきます。

農業に対して誤解や負のイメージを持たれているのが悔しくて、そんなイメージを変えたい、そして感謝される、自分の子どもが誇りに思う職業にしたい、また東京に農地を残

生産者仲間の根岸隆好さんと野菜の生育状況をチェック（左）

したい、そう思い続け、ひたむきに営農をしてきました。

学校や保育園では畑の「冨澤先生！」

学校や保育園では畑の先生「冨澤先生」と呼んでくれます。さらに今、栄養士科のある学校の農学の非常勤講師も受けさせていただいています。教員になりたかった時期もありましたが、思いもよらず先生になることもできました。自分や仲間の販路拡大にも寄与することもでき、内藤とうがらし、ノラボウ菜を中心とした江戸東京野菜の活用という新しい価値を創出できました。

農業は実に多様な可能性や自分の能力を高め発揮する機会のある職業です。経営者でもあり、職人でもあり、営業マンでもあり、福祉、サービス業でもあります。そして何より最大の強みは人を笑顔にすることができることです。

最近では「農業の仕事をしている」と話すと以前と違った反応があります。「何を作っているのですか」「食べたいです」「納めているお店に行ってみたいです」やっとまっとうな評価をしてもらえるようになりました。必要不可欠な存在であり続けたい、イメージが好転し、いつまでも東京に農地を残していくという果てしない夢に向かって。

（写真／本多健、★冨澤さん提供）

2015年の東京都農業祭。地元JAで出品した野菜の巨大な宝船の前で一人娘と記念撮影★